



第一次寄贈校の声

第一次寄贈は、岩手、宮城、福島3県の286校に行いました。
新聞で紹介された寄贈校の声を一部ご紹介いたします。
(記事はホームページ掲載用に、個人名を省略するなど再構成しています)

●陸前高田市立小友小学校 《読売新聞 2012年8月30日朝刊より》

小友小学校には8月、今年の金環日食など最新のデータが載った科学や郷土の作家の本など計約60冊が届いた。

同小は震災で1階に津波が押し寄せ、校庭はがれきで埋まった。外で遊べなくなった児童は本をより大切に思うようになった。児童で作る図書委員会の委員長、副委員長は「金環日食の本は、図書室のお勧めコーナーに置く」と喜んだ。図書担当の教諭は「こちらで希望する本を購入できるので、ありがたい取り組みです」と児童の笑顔を見つめた。

●亘理町立荒浜小学校 《読売新聞 2012年10月5日朝刊より》

第1次分に応募した亘理町立荒浜小の教頭は「新品の書籍の中から幅広く選べて本当に助かりました。子どもたちもそれぞれ興味のあるジャンルの本を喜んで読んでいます」と話している。

●釜石市立唐丹小学校 《読売新聞 2012年10月10日朝刊より》

プレハブ校舎で授業を行う釜石市立唐丹小学校にも児童書や図鑑がプレゼントされ、子どもたちは「読みたい本が新しく見つかった」と喜んでいる。寄贈図書は80冊余りに上る。

沿岸部にあった唐丹小は津波で校舎3階まで浸水し、図書室の蔵書もすべて流された。児童らは震災後、市立平田小の空き教室を借りて学び、今年1月からは唐丹中の校庭に完成したプレハブの仮設校舎に65人が通っている。

校舎2階にある図書室に並ぶのは、プロジェクトを含め全国から贈られた書籍約2500冊。図書委員長は「学校のみながたくさんの本を読むことができるようになって、すごくありがたい」と喜び、児童会長は「読みたい本が津波で流されてしまったのは残念だったけど、支援のおかげで読みたい本が新しく見つかった」と感謝している。

学校長は「被害を受け、真っ先に頭に浮かんだ必要な物は、本だった。本がない時は子どもたちに不自由な思いをさせてつらかったが、これだけ頂くことができて助かった」と話している。

●須賀川市立第一小学校 《読売新聞 2012年10月11日朝刊より》

須賀川市立第一小学校は、震災で校舎が使用できなくなった。昨年8月から市内の仮設校舎で授業を続けている。

購入した図書は「マンガ日本の歴史」など約200冊で、既に116冊が書店から届いた。休み時間には多くの児童が図書室を訪れ、熱心にページをめくっている。6年生の児童は「本が増えてうれしい。近代化が始まる明治時代が好きなので、マンガ日本の歴史をいっぱい読んで勉強したい」と話した。